

嵐 嘉一

## 『犁 耕 の 発 達 史』

—近代農法の端緒—

農山漁村文化協会 1977. 12 182 ページ

明治三老農の1人、林遠里を指導者とする勸農社出身の農業教師が、筑前式抱持立(かかえもつたて)犁と呼ばれる深耕用の無床犁をたずさえて全国をまわり、北九州の先進的馬耕技術を伝えたことは、明治前期の日本農史を色どるエピソードとして名高い。その延長上に、近代日本におけるもっとも重要な農業技術革新の1つとされる短床犁の開発、それによる西日本で伝統的に用いられてきた長床犁の置き、東日本での馬耕の普及があったことも周知のとおりである。

こうした犁耕の発達過程についてのスタンダードな解釈(近頃のはやり言葉でいえば「パラダイム」)は次のようなものであった。普通、日本の水田耕作に伝統的に用いられてきた犁は長大な犁床をもつ「長床犁」であった。これは中国大陸から渡来したものだが、華北から地中海までつながるユーラシア大陸の乾燥地農業用に開発された保水を目的とする浅耕用の犁である。この犁は主として西日本において牛に引かせて用いられてきた。犁床が大きいため安定がよく、操縦が容易ではあるが、土壌抵抗が大きいので牽引力の大きい牛には適するが、速度は早くとも牽引力の小さい馬にはむかない。したがって馬地帯たる東日本には犁耕が普及せず、手鋤による人力耕がおこなわれてきた。西日本においてすら、近世に入り、水田施肥が一般化し、土壌有機質の分解が要求されるようになるにつれ、深耕に適さない長床犁は鋤に置き換えられる傾向があらわれていた。能率よく深耕を可能にする犁

を開発し、土地生産性を高め、農業集約度を向上させることは、明治以降の近代農法成立にとって残された課題であった。この課題に答えたものこそ筑前の抱持立犁であり、その改良型としての近代的短床犁だったのである。

以上のようなパラダイムでは、長床犁は元来乾燥地帯で開発され、水田耕作に適さない「不完全」な農具であり、近代化の契機を含むものではない。農法近代化を担ったのはあくまで、塩水選や正条植などと並ぶ萌芽概念としての深耕に適した無床犁だったのであり、近代的短床犁の開発はその延長線上においてのみ捉えることができる。

このように明治近代農法を捉える基本的視座=パラダイム……そんな単純なパラダイムはおまえのような非農法専門家の想像に過ぎないとの批判は甘受するとして……はこの嵐博士の著書によって根本的な転換をせまられる。嵐氏は長床犁、同氏の用語では「打延(うつばえ)型犁」、は日本の風土条件の下で「不完全」もしくは「非合理」な稲作用具であったとは考えない。長床犁を単に水田耕起用具としてのみ見るならたしかに深耕に適さないという基本的欠陥は否定できない。だが、湿田ではその操作安定のため長大な犁床は不可欠であるし、さらに水田の保水のための床締めという積極的な目的にも長床犁は適している。つまり、用排水施設が不完全なまがり無床犁ないし短床は犁生産力向上の契機たりえない。したがって、近代短床犁が開発されて以後も長床犁はその長所のゆえに根強く使用され続けたし、所によっては短床犁を経過せず長床犁から直接に自動耕うん機へ移行するケースすら存在した。

さらに、近代短床犁の開発を無床犁の系譜のみとして捉えることは誤りであると嵐氏は説く。近代短床犁の1つの起源は長床犁の変型としての中床犁にあり、それは明治以前から使われてきたが、明治以降においても無床犁の故郷である北九州を含めて広範に使用され続けた。近代短床犁の起源は、無床犁に犁床を付けるという工夫と長床犁の床を短くするという工夫とのクロス・ポイントとして捉えるべきであると考え。無床犁からの発展にしても、あまりに著名な筑前式抱持立犁のゆえに、明治の犁型の発達を無床犁から近代短床犁への移行として捉えがちであるが、実際には、無床犁の変型としての短床犁はすでに明治以前から多く用いられており、近代短床犁の直接の系譜は抱持立犁であるよりは、こうした近代前から開発されていた短床犁に求めるのが妥当であろうとする。

こうした立論と平行して、勸農社によって指導された

抱持立犁の全国的な普及についての過大評価が是正されなければならないとされる。勸農社の活躍した明治10～20年代における牛馬耕の増加はわずかなものであり、土地改良の進展なしに馬耕が普及する可能性はなかった。さらに明治30年代末近代短床犁が開発されるまでに畜力耕はいくらかは増加しているとしても、そのうち抱持立犁の割合はわずかなものであり、勸農社系以外に九州から招聘された農業教師がもたらした伝統的短床犁の果たした役割の方が大きかったと推理される。

かくして林遠理・勸農社の活躍～抱持立犁・馬耕の全国普及～近代短床犁の開発という図式で描かれた明治近代農法の成立史は根本的な改訂をせまられるのである。こうした嵐氏の立論は、同氏の農業技術開発の現場に従事された多年の経験と歴丈・克明な資料操作によって支えられている。その資料批判を通じて同氏の立論の適否を論ずる能力は、もとより農法専門家ではない評者が持つところではない。だが、かつて近代日本における農業成長の数量経済的分析にたずさわった過程で明治農法に関する文献を多少ながら読んだ者として、この本が、第一級の知的刺激を与える著作であることは確言できる。嵐氏の前2著書『日本赤米考』、『近世稲作技術史』とならんで本書を特徴づけるのは農業技術の実態をふまえ、個々の技術をそれ自体としてではなく技術体系の一環として捉える……犁耕でいえば水田耕起のみではなく水田床締め、裏作の畝立てなど諸作業の総体として捉える……態度がつかぬかれ、その立場から明治日本農法の特徴が風土のおよび歴史的な展望の上に浮彫りにされている。この著作を契機として、専門家間に論争が展開され、明治農法成立についてのより高次のパラダイムが形成されることを祈ってやまない。〔速水佑次郎〕